

かんじょうせん
環状線

「^{かがや}輝ける^{せいしゆん}青春」などというが、その青春というものには、だいたいにおいて金がない。おれもそうだ。金がなくてはこの世は^{やみ}闇だ。だからこの言葉は^{むじゆん}矛盾している。

しかし中には、金を持っている若い奴がいて、こういう奴を^{ライバル}恋敵^{ばあい}にした場合は^{ひげき}悲劇である。おれの場合がそうである。

「そりゃあ、おれには金はない」と、おれは彼女にいった。「地位もない。しかし君が好きだ。愛している。たのむ。あんな奴とは結婚しないでくれ。あいつは豚だ。親の^{いさん}遺産^つを継いだから金持ちになったというだけの、ぐうたらな^{もの}なまけ者だ。あれは河馬^{かば}だ白痴^{はくち}だ。おれは君が、あんな奴と結婚すると考えただけで気が変になる」

「やめて。もう、おそいわ」彼女はおれの胸の中で、ずっと泣き^{つづ}続けていた。三時間も前からだ。

「いくらいっても^{むだ}無駄よ。そう。あいつは豚よ。河馬^{かば}よ白痴^{はくち}よ。でも、あなたとは結婚できないの。今のあなたには、わたしの両親を^{やしな}養うことができないじゃないの。それが、あの男ならできるのよ」

「もい少しだけ、待ってくれ」おれは彼女をかきくどいた。「今のおれは、^{すうがくしゃ}ただの^{たまご}数学者の卵だ。だが、もうすぐ^{じょきょうじゆ}助教授になるんだ。そうとも。おれには、
、
そのあてがある。そうなれば、君の両親の面倒も^{めんどう}見てあげられる。もっとさきでは、^{きょうじゆ}教授にもなれるんだ」

「だめよ。それじゃ遅いのよ」彼女はおいおい泣いた。美しく澄んだ彼女の瞳も、今は充血してまっ赤だ。

「ああ」彼女は激情的に身をよじた。「わたし、からだかふたつほしい」

「からだかふたつだって」おれは、ちょっと彼女の肩を引きはなし、その赤い眼をのぞきこんだ。「ふん。なるほど。そのとおりだ。君かふたりできたら、何もかも解決する。ひとはおれと結婚する。そうだ。そしてもうひとりの君は、その豚と結婚する」

彼女は気味悪そうに、身を遠ざけた。「いやねえ。そんなこと、できるわけがないじゃないの。気はたしか。しっかりしてよ」

おれは真顔でいった。「でも、やってみなけりゃわからないよ」

彼女はまた、わっと泣き出した。とうとうおれの気が違ったと思ったのだそう。泣きながら帰っていった。

おれはすぐ、薄ぎたない下宿の机の上にセクション・ペーパーをひろげた。

彼女の結婚式は一週間のちである。それまでになんとか結論を出さなければいけない。

寝ることも、飲み食いも忘れ、おれはグラフと数式の渦に身を投げた。

六日ののち、やっと結論が出たので、おれは電話で彼女を呼びよせた。

「どうかしたの」彼女はすぐ、やってきた。

「これを見てくれ」おれは彼女に、グラフと数式をごちゃごちゃと書きこんだセクション・ペーパーをひろげて見せた。

「何がなんだか、さっぱりわからないわ」

「これはおれの専攻している位相幾何学の方程式のひとつだ。座標は四つある。x軸

とy軸とz軸とt軸だ。x、y、zは三次元空間^{じげん くうかん}をあらわし、tは時間をあらわしている。これを数式^{すうしき}であらわすと、

$$a = \int \int af(x)g(y)k(z)[h(t)]dt = 2a$$

とある。この、最初のa^{さいしよ}というのは君だ。このa^{いこう}を移項すると最後に2a^{さいご}となる。つまりこの2aは、君がふたりになったということなんだ。うまくいくか

どうかわからん。しかしおれの結論^{けつろん}さえ正しければ、君は異次元空間^{い じげん くうかん}からの

分身^{ぶんしん}を得られるはずだ。この数式^{すうしき}を図^えであらわすと、こういうグラフの連続^{れんぞく}になる」おれは彼女に、そのグラフ^さを指さした。

「どこかで見^{かっこう}たような格好ね」

「そうだろうとも。毎日^{としん ぶ こんでん}見^{すうしき}てるかもしれない。これは都心部の国電ⁱⁱの地図と同じ形なんだ。だから、ある一定の時間内に、この数式^{すうしき}どおりに、山手線と中央線の上^{いどう}を移動^{たげん こうか}することによって、多元効果^{たげん こうか}があらわれる。つまり、君がふたりできるってわけだ」

「信じられないわ」

「信じなくっていいさ。だが実験^{じっけん}してみる価値^{かち}はあるだろう」

「どうすればいいの」

「まず君は、東京駅^かから上野方面^か行きの山手線^かに乗り、一度も乗り換え^かせずに東京駅^かまでくる。東京駅^{すどお}を素通り^{すどお}して神田駅^かで中央線^かに乗りかえて代々木駅^{よよぎ}へ出、また乗りかえて今度は山手線^{ぎゃく}で逆に上野方面^かをまわって秋葉原駅^かへ出る。秋葉原^{かえ}で乗りかえてお茶の水^{とお}へ出、そこで引き返^{かえ}して神田^{とお}を通り東京^{かえ}へ帰ってくる」

「すると、どうなるの」

「君がふたりできる。つまり、お茶の水からきた電車と、秋葉原からきた電車の両方から、君がおりてくるんだ」

「ほんとかしら」

「君が時間と、乗り換え駅を間違えさえしなけりゃね。さあ、東京駅へ行こう。今すぐに」

昼すぎの東京駅中央線ホームで、おれはいら立ちながら彼女を待った。もうすぐ彼女を乗せたお茶の水からの電車が入ってくるはずだった。おれは何度も時計を見あげ、腕時計と見くらべた。そのうち、おれはふと、えらいことに気がついた。

もし彼女がふたりになったら、おれはそのうちのどちらを選べばいいのだろう。それに、うぬぼれるわけじゃないが、どうせ彼女たちはふたりとも、おれと結婚したがいるにきまっている。大変だたいへんだ。決めようがない。どうやって決める。ジャンケンさせてみたって問題の解決にはならない、それにだいいち、同じ人間同士ジャンケンをして勝負になるのかどうか疑問だ。

死ぬほど悩んでいるうちに、お茶の水からの電車が入ってきた。まん中へんの車輦から彼女がおりてきて、おれに駈けよった。

「どう、うまく行って」

「まだわからん。さあ、あっちのホームへ行ってみよう」

おれは彼女といっしょに、となりの外まわり線ホームへ行った。ちょうど山手線の、秋葉原からきた電車が入ったところだった。人の流れにさからってホームの中ほどまできたとき、おれたちはそこに立っているもうひとりの彼女を見つけた。

ふたりの女——といっても、もともとはひとりの、同じ女なのだが——は、敵意に満ちた眼つきでお互いを見つめあった。それはそうだろう。考えてみれ

ば彼女たちは恋敵同士なのだから。

新しい彼女——つまり彼女を A とすると、A' の彼女——が立っている背後には、線路をひとつへだてて、逆まわりの山手線の電車が入っていた。その電車が発車したとき、おれはとびあがるほどびっくりした。

そのプラットフォームには、さらにもうひとりの彼女——つまり A'' の彼女が、こっちを向いて立っていたのである。

これはいったいどうしたことだ——おれは混乱した。向かいあわせた三面鏡の間に立っているような気持である。

彼女 A'' は、とり残されるのを恐れるかのように、あわててこっちのホームへやってきた。合計三人の女は、途方にくれているおれのまわりをとりまいてわめき出した。

「いったい、これはどういうわけ」

「ひとり多いじゃないの」

「どうしてくれるのよ」

「ちょっと待ってくれ」おれはうろたえた。「不思議だ。おれの計算のまちがいはないはずだが——。君たちは、いや、君は、たしかにおれのいった通りに行動したんだろうな」

「あっ、そういえば代々木で、上野方面へ行くところを、まちがえて品川方面行きに乗っちゃったわ。あわてて原宿でおりて引っ返したけど……」

「それでわかったぞ。つまり君はまちがえて原宿へいった君だし、また君は、秋葉原からお茶の水をまわってきた君だ。それから君は、秋葉原からまっすぐにきた君なんだ」

おれたち四人は、しばし茫然としてそこに立ちすくんだ。

「じゃあ、誰があなたと結婚するの」

「わたし、あの男と結婚するのはいやよ」

「^{のこ}残されて^{よけいしゃ}余計者にもなりたくないわ」

「わたしだってそうよ」

「いったい、どうしてくれるの」

「どうしてくれるの」

三人の女が泣き叫びはじめた。ほっとけば、三つ巴^{どもえ}のつかみあいが始まるに
きまっている。おまけに人だかりがしはじめた。

「わたしたち、なぶりものにされたんだわ、この人に」

おれは走り出した。ちょうどホームに入ってきた電車に、おれはとび乗った。

もちろん、三人の女はおれを追ってきた。逃げると思ったらしい。だが、う
まい具合に彼女たちの眼の前で、ドアがぴしゃりと閉まった。ドアを叩き彼女
たちはわめきたてた。

「ねえ。どこへ行くつもり」

おれは電車の窓から首を出して答えた。「おれをふやしてくるんだ」

(「宇宙塵」昭和三十六年一月号)

- i The dictionary reading of “恋敵” is “こいがたき”. The okurigana “ライバル” comes from the original text.
- ii “こんでん” means “National Railroad”, e.g. JR before privatization.